

株式会社三和ドック
代表取締役 寺西 勇氏

造船業界には今、三たび不況の足音が聞こえて来ています。

不況の最中、1978年に修繕船専門の三和ドックに入った私にとって造船不況は大きなショックでした。

今と違い、当時は大企業は絶対につぶれない存在であり、あえて親の経営する中小企業に入った私は誤った進路を選択したとの諦観の念とともに、如何にしてつぶれない会社にするか真剣に悩み考え、たどり着いた結論は、進むべき道に特效薬も王道もない、正攻法しかないと言うものでした。

当時の三和ドックは中途採用がほとんどの寄せ集め所帯でしたが、これからは出来る限り優秀な新卒を採用し、育て、技術力を上げ、組織化し、設備を近代化すると意気込みました。成算があった訳ではなく、でも、これしかないと言う気持ちでした。

そして、手始めに手作りの求人パンフレットを手を思いつくままに大学、高専、高校を回り、1980年には当社始まって以来の15人もの新卒者の入社を迎えました。その結果、順調に成長出来たと申し上げたい所ですが、実際はそこから苦労の始まりでした。

つくづく身に染みるほど感じたのは、教育とは文化であり、人を育てようというカルチャーのない所では人材は育たないどころか、辞めてしまうという現実でした。採用は出来ても、育成は別物でした。それから次の不況までの約10年が私にとっての苦闘の時代でした。

1985、86年の造船不況時、大手中手の造船所がリストラ合理化と称して人材を切り捨てるのを見聞きし、なんともつたいない、優秀な技術者、技能者こそ限りある貴重な財産なのにと驚き、と同時に何が足らなかったか、何をすべきか気が付きました。

ある意味での発想の転換でした。今までは、あくまで田舎の中小企業という枠の中での安定を目指していたにすぎない。そんな発想では、優秀な人材が入り、育ち、定着し、後進を育てようとする筈はない。これからは既成概念にこだわらず考え行動すべきだ。如何に魅力的な会社にするか、トップが将来ビジョンを社内に公開し、どしどし実行すべきだと。

私が、1999年に因島技術センター、2004年に造船技能開発センターを立ち上げ、業界の人材育成に積極的に関与しているのはこの経験からです。その後、多くの方にご協力ご支援を頂きながら、人材育成事業も当社も順調に歩んでいます。

海技研にはぎょう鉄などの教材の開発作成にご協力頂き、また船舶海洋工学研修をサテライト教室方式で全国6カ所の地域技術センターにて受講させて頂いています。この場をお借りしてお礼を申し上げますと同時に、今後、ますます海事産業の効率的な人材育成に海技研が貢献される事を祈念しております。

【略歴】(てらにし いさむ)

1949年広島県生まれ。72年阪大物性物理工学科卒業後、造船学科に2年後期から学士入学。75年卒業後、尾道造船修繕課入社、78年(株)三和ドック入社、80年常務取締役、88年社長就任。98年中造工副会長。